くらしは文化 no.83

京都府京都市

京都府庁旧本館

日本人が建て、後世の模範となった明治期の西洋建築の官公庁舎

京都府京都市の京都府庁旧本館は、京都府技師であった松室重光の設計で明治37（1904）年に竣工。行政府と立法府を一体化した、ルネサンス（一部ネオ・バロック）様式の建築で、日本人による西洋建築技法習得の到達点の一つと言われる。国指定重要文化財。

京都御所の西方に位置する京都府庁旧本館は、当時の西洋建築技法の粋を集めて建てられた。レンガ造（一部石造）、外壁は擬石モルタルで、正面を数々の装飾が彩る。

大理石の手摺子や親柱に手の込んだ彫刻が見られる大階段。窓から桜が見える。

昭和44（1969）年まで使われた旧議場。議長席を中心に約60の議員席を半円形に配置、吹き抜け2階部分に傍聴席を設ける。①ニッチ②持ち送りの装飾にもアカンサスが見られる。③理事席下部の排気口。④議員席の足元には温風が出る送風口がある。

正庁では公式行事や重要な会議が行われた。折上小組格天井といった日本建築の技法も見られる。⑤天井の鏝（こて）絵。⑥扉上部のペディメント。

風格ある造りの旧知事室。暖炉や調度の意匠も秀逸。約67年間に24人の知事が執務した。

⑦2階の傍聴席へ続く階段。⑧回廊のアーチ越しに望む中庭は7代目小川治兵衛が手がけた。

京都府庁旧本館の正面を飾るのは、精密な彫刻を施したペディメントや丸窓、円柱で支えられた石造りのバルコニー。また、ドーマーを配した大型の角型マンサード屋根に鱗（うろこ）状のスレートを葺き、その左右には建物の両翼がシンメトリーに伸びるなど、ルネサンス様式（一部ネオ・バロック様式）の特徴が随所にちりばめられている。竣工当時は明治政府の整備が進んで行政事務が増大。新時代の要請に応える西洋建築で、大規模な官公庁舎の建設が求められていた。京都府庁も前代は木造で議場も備わっていなかったため、新庁舎の建設が必要であった。設計は辰野金吾の教え子で京都府技師の松室重光である。

建物は口字形の平面を持ち、中央を西洋風の整形式庭園として、南側が正面、北側から突出した位置に議事堂がある。2階正面中央の正庁は最も広く、格式が高い部屋で、大正・昭和両天皇の即位の礼の際に内閣の閣議が開かれたほか、公式行事や公賓の接遇などが行われた。南東角の知事室にも重厚な回り縁や格天井といった意匠が凝らされ、明治期を代表する西洋家具の製造業者・杉田幸五郎の製品が置かれている。議事堂は旧本館と接続しているが、マンサード屋根が旧本館とは別に架かり、独立した棟のように見える。館内の議場は白漆喰の飾り壁や彫刻で仕上げた2層吹き抜け空間。階段状に並ぶ5列の議員席が、アーチを描いて議長席や理事席を取り囲んでいる。2階には丸鋼管の列柱とアーチをしつらえた傍聴席があり、その上の高窓から外光が差し込む。電気のシャンデリアやスチームによる全館暖房設備も整っていた。

当館は竣工120年を超えた今も当初の姿をとどめる現役で日本最古の官公庁舎として貴重。今後もその歴史を刻んでいく。

©NPO法人京都観光文化を考える会・都草

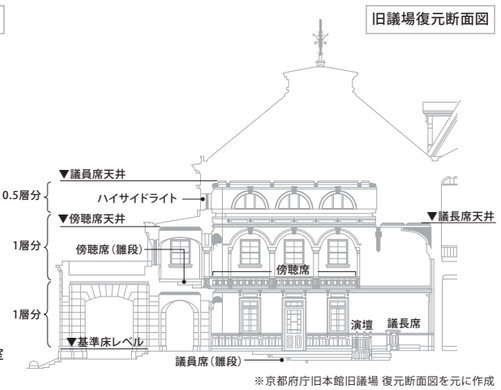
江戸時代の役所・京都守護職の上屋敷跡に建つ旧本館。55の部屋には知事室や正庁、議長室などがあった。現在も執務室として利用されている。

マンサード屋根を頂き、建物北側に突出して建つ議事堂。庁舎と議事堂が同一建物に収められているのは当時、先進的であった。

大屋根の屋根棟飾りはアカンサスがモチーフ。

正庁は2階中央にあり、その大屋根に三角形のペディメントが載る。漆喰で精巧な装飾を施したもので格式の高い建物に多くみられる。

大屋根のドーマー。換気用で中に部屋はない。



※京都府庁旧本館旧議場 復元断面図を元に作成

用語説明

【ルネサンス様式】15～17世紀初頭にイタリアを中心に広くヨーロッパに普及した建築・美術様式。古代ギリシャ・ローマ様式を復興させ、建築ではシンメトリーとバランスを重視した。

【ネオ・バロック様式】ヨーロッパの19世紀後半期に見られる芸術の一傾向で、バロック的な動感豊かな表現をめざすもの。

【松室重光】1897（明治30）年、東京帝国大学造家学科卒業。京都府技師に着任後、古社寺の修復を手掛けながら武徳殿や京都ハリストス正教会などの設計にも携わった。

【整形式庭園】明治期に入ってきたフランス式幾何学庭園の影響によって始まった、大胆に直線や人工的な曲線・曲面を取り入れた庭園。

【7代目小川治兵衛】明治～大正期を代表する庭師。平安神宮神苑、山縣有朋別邸の無鄰菴庭園なども作庭。

京都府京都市上京区下立売通新町西入
協力：京都府

くらしは文化 バックナンバー